

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 18 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21320018

研究課題名（和文）「ドイツ民族主義宗教運動」の生成及び展開とその宗教史的意味に関する総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive studies on the origin, development and religio-historical significance of the 'Voelkisch-Religious Movement' in Germany

研究代表者

久保田 浩（KUBOTA HIROSHI）

立教大学・文学部・准教授

研究者番号：60434205

研究成果の概要（和文）：従来本格的な研究の主題として扱われてこなかった、20 世紀初頭のドイツ民族主義的宗教運動の成立と展開を、主に未刊行資料の蒐集と分析を通じて解明し、政治的な意味でのナチズムの一生成要因としてではなく、宗教史的・文化史的な文脈の検討により、当時のキリスト教の民族主義的性格、脱キリスト教的文化形成という宗教的欲求、美的保守主義的な「芸術宗教」性（身体文化・視覚文化・メディア文化）との連関において明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The so-called 'Voelkisch-Religious Movement' during the first decades of the 20th century in Germany had not been properly investigated as an independent object of research, while it had mainly been contextualized in the political history of National Socialism. In this research project, its interconnection with the nationalist characteristics of Christianity, a series of religious quests for a post-Christian culture/religion, the features of 'Art Religion (Kunstreligion)' in the aesthetic-conservative thoughts has been elucidated on the ground of the examination of unpublished archival materials, and then religious and cultural contexts.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2010年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
2011年度	3,000,000	900,000	3,900,000
年度			
年度			
総計	10,400,000	3,120,000	13,520,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：宗教学、西洋史、近代ドイツ、民族主義宗教、宗教史、芸術宗教、知識人宗教

1. 研究開始当初の背景

(1) 従来、ドイツにおける「民族主義宗教 *völkische Religion*」運動の研究はナチズム運動との政治思想史的連関という観点から論じられることが多かった。こうした観点は、民族主義運動が 1933 年以前の保守主義と密接に融合し、部分的にナチズムの台頭に一役

買うことになったという歴史解釈枠組みを生み出し、それはこうした理解を批判的に捉えようとする研究にも影響を与え続けている。しかし同時に、「ナチズムの温床となった政治運動」としての民族主義運動という解釈的前提を反省し、宗教史的観点から民族主義運動（の一部）を「民族主

義宗教」と概念化して分析しようとする動きも現れている。こうした研究動向は、ナチズム運動との因果論的観点のみではなく、19世紀のドイツ国民国家成立過程及び第一次世界大戦の精神的衝撃という観点からも、民族主義運動を位置付けようとする方向性を強化することになった。

(2)本邦においては、19世紀ナショナリズム研究や政治思想・運動としてのナチズム研究に比較して、民族主義運動の研究自体が十分には遂行されてこなかった。欧米圏の研究の翻訳を通して、民族主義運動とナチズム、特にその反ユダヤ主義との直接的因果関係を実証するという解釈枠組みが紹介されたり、日本人研究者によって19世紀末から20世紀初頭のドイツの精神状況の研究に新たな次元が切り拓かれたりしたが、そこにおいても、ナチズムの精神的起源・土壌として民族主義(宗教)運動が捉えられている限りにおいて、旧来の歴史解釈枠組みが踏襲されてきた。

(3)こうした事情から、宗教学的・宗教史的・文化史的観点からの総合的分析の必要性が要請されていた。国内外の研究状況においては、鳥瞰的かつ包括的観点から総合し体系化しようとする視点は現れていなかった。それは一方では、史料制約(史料の所在確定の不十分さ、史料批判・史料編纂作業の遅れ等)の下で、個別的研究がこれからも不可欠な前提作業として遂行されなければならないことが主要な原因ではあるが、他方で、民族主義運動を民族主義宗教運動として分析する視角、つまり宗教史的・宗教学的・文化史的に研究する観点が希薄であったことも研究の体系性の欠如と連動していたと言える。

2. 研究の目的

以上の研究状況を踏まえ、本研究は19世紀中葉におけるドイツナショナリズム台頭期から1945年に至るまでの、「民族主義宗教」運動の誕生及びその展開と変容、そして民族主義宗教運動が社会内で果たした政治的・文化的役割を、文化史的・宗教史的・宗教学的に考察することを目的とした。本研究においては、研究の焦点を、ドイツ「民族 Volk」ないしは北方「人種 Rasse」に特有の宗教性を謳い、それを軸として体制的・支配的宗教を代替し得る宗教を打ち立てようとした「民族主義宗教運動」に絞り、この運動の歴史的展開の具体相(運動の成立・展開並びにそこで指導的役割を果たした諸団体・諸個人の宗教思想・儀礼形態・布教のメディア戦略等)を史料に基づき再構成し、従来のドイツ宗教史研究史上の欠落を埋めることが

目指された。時代的には先述のように、19世紀中葉からナチ政権が崩壊する1945年までが主要な研究対象となるが、同時に、民族主義宗教的思想及び運動が、第二次大戦後の政治的・文化的環境の中で如何なる形態で残存し続けてきたか、如何なる社会内的要因がそうした残存を可能としたのか、そして存続のための如何なる戦略が展開されてきたのかも考慮した。具体的には以下の諸点を目的として研究を進めた。

(1)民族主義宗教運動の諸団体・諸個人に関する資料的研究の進展。個別の団体及び個人が展開する民族主義運動の具体的様相を示す資料をドイツ・オーストリア各地の文書館並びに図書館で調査した。

(2)個別団体の歴史研究に基づくドイツ民族主義宗教運動の類型化。暫定的に、①キリスト教系・自由宗教系宗教運動、②アリオゾフィー系宗教運動、③「ドイツ信仰」系宗教運動、④青年運動系・生活改革運動系宗教運動と類型化し、上述の個別研究に基づきつつ、より精緻な類型化を目指し、運動全体の政治的・文化的位置づけを図った。

(3)民族主義宗教運動の宗教史的観点からの研究に関連する方法論的・理論的考察。「宗教史」という枠組みから民族主義宗教運動を分析する際の諸問題、「民族主義的(フェルキッシュ)」という概念の類型概念としての有効性、民族主義宗教に関する運動体論・宗教共同体形成論、思想普及を分析するためのメディア論等について、実証的な事例研究に基づきつつ反省を加え、一般的概念・理論形成を目指した。

(4)ドイツ民族主義宗教運動の歴史的な位置づけ。従来のドイツ民族主義運動研究においてその位置付けが困難であった民族主義宗教運動を、民族主義運動という(政治的・文化的・宗教的要素から構成される)広範なスペクトルの中に据え、ナチズムという現象に引き寄せられた政治史的解釈枠組みを再考し、民族主義運動独自の宗教的・文化的次元を明るみに出すことにより、そのドイツ文化史上の意味を解明することを目指した。

3. 研究の方法

(1)ドイツの研究グループ・研究者との共同研究。ドイツ国内における研究状況を把握し、実質的な研究遂行に必要な体制を確実なものとし、全研究期間を通じて、緊密な研究協力を行なった。研究代表者・分担者のこれまでの関連研究を通して築き上げてきた国際的協力関係を出発点として、

ドイツにおける諸研究グループとの協力体制を構築・強化した。

(2) 近年刊行された諸史資料の検討と研究動向の分析。史料が刊行されている例は些少であり、最近約五年以内に刊行された二次文献資料を検討し、最近の研究に見られる、研究・調査対象の選択の傾向、史資料の取り扱いを巡る方法論的特殊性・問題点、歴史叙述の理論的・社会政治的背景等に着目し、最近の分析傾向の解明を目指した。特に、(政治的) 民族主義運動について近年刊行されている諸論考を検討し、それらの中で民族主義宗教運動が取り扱われている程度、理論的参照枠、方法論に着目し、本研究の方法論の反省のための素材とした。同時に、当事者による史料編纂作業が着手され、部分的に刊行されている場合もあり(例えば、*Deutschgläubige Gemeinschaft* の私費出版による史料集、*Bund Freireligiöser Gemeinden* の当事者による運動通史等)、そうした、所謂研究文献ではなく、当事者・インサイダー向けに出版され、一般の書籍市場には登場してこることが少なく、従って学問的史料批判を経ない刊行物の出版状況も特に配慮しつつ、資料として活用していくと共に、現在の民族主義宗教運動のこうした自己表現の性格も併せて分析した。

(3) ドイツにおける史資料蒐集及び分析。特にドイツ連邦文書館、ドイツ青年運動文書館、現代史研究所文書館、ベルリン・ドキュメント・センター、ゲルマン国立博物館、ベルリン・ギャラリー文書部、ベルリン国立図書館、並びにいくつかの大学図書館・文書館(ボン、ケルン、マンハイム、テュービンゲン、フライブルク、グラーツ)において、遺稿、未刊行資料、画像資料等を調査・蒐集した。また、研究対象とする諸宗教団体及び個人の史料・遺稿等が未整理の場合には、その所在を確定し、閲覧可能性を探った。

(4) 共同研究会・国際シンポジウム等の実施。研究代表者・分担者間の研究進捗状況に関する情報を共有し、また当該研究領域に関連する他の研究者との交流を通して本研究の効果的な進展を図るために定期的に研究会を開催した。特に、(政治的) 民族主義運動と宗教思想史の研究者との研究協力関係を構築し、宗教史的な研究の方向性との接点を探った。また国際シンポジウムを企画・実施し、国際的かつ学際的観点から当該研究の可能性を検討した。

4. 研究成果

資料調査と資料の分析並びに宗教史研究の

方法論的理論化に基づき、定期的を実施された研究会並びにシンポジウム、及び以下の「5. 主な発表論文等」に記した形で研究成果を公表した。

(1) 資料調査に関しては、上記文書館等において、未だ体系化されていない関連資料の所在を解明し、その一部の分析を行ったことで、以後のドイツ民族主義宗教研究にとっての資料整備に一定の進捗が見られた(特に、宗教思想の視覚的表象、雑誌等メディアによる思想普及戦略等に関する資料の整備)。

(2) 研究協力環境の整備に基づく成果については、①まず、定期的を実施された研究会において、宗教史研究における方法論的並びに理論的諸問題(学的認識主体の言語的拘束性、言語的・地域的学問伝統と対象選択の関連、宗教史叙述の政治性と創作性、「民族主義宗教」概念の有効性等)が検討され、それが具体的な資料の分析との間に有機的な相互作用を及ぼした。研究会においては更に、主題的に、土地改革理念と宗教思想との関連、そして以下の思想家と民族主義的宗教思想との連関について議論され、新たな知見が提示された(民族主義的キリスト教運動家マティルデ・ルーデンドルフ、神智学者ルドルフ・シュタイナー、シオニストであるマルティン・ブーパー、宗教現象学者フリートリヒ・ハイラー、民族主義的画家ルートヴィヒ・ファレンクロック並びにフィドゥス、プロテスタントの宗教哲学者パウル・ティリッヒ、ユダヤ人哲学者エルンスト・ブロッホ、民族主義的思想家ヴィルヘルム・シュヴァーナー、詩人シュテファン・ゲオルゲ)。②国際的(特に独韓日)かつ学際的(特にドイツ文化論、宗教学、地域研究、歴史学)研究協力関係を構築することにより、独韓日の研究者による国際学会でのパネル実施、国際シンポジウムの実施によって、以下の研究成果を世に問い高い評価を得た。ドイツ民族主義宗教運動は、19世紀以降の脱教会化した社会・文化状況において、「流浪する宗教性」の発現として特徴づけられるものであり、それは、それまで文化を規定し続けてきた制度的教会の周縁並びに外部、制度的学問(とりわけ宗教学)、造形芸術、ポエティーク等の領域における代替宗教性の確立を目指す動きであった。そして、従来ほぼ等閑に付されていた民族主義宗教運動を学問的に検討するという営為は同時に、「学問」「宗教」「芸術」という名の下における知識人の想像的表象を検討することと同義でもあり、従来の学問的アプローチの根底的な問い直しを要請するものであるとの認識に至った。以上の研究会並びに国際的かつ学際的次元で

の研究成果により、将来的に研究協力環境を拡充していくべき必要性が明らかとなり、関係研究者の間で、本研究期間終了後にも、組織的かつ計画的にこうした国際的・学際的研究を進めていくことで合意され、継続版の国際シンポジウムの計画が進められている（2012年11月東京にて実施予定）。このように、本研究はこれまでいずれの学問分野においても正面から取り扱うことが回避されていたと言っても過言ではない対象を、国際的・学際的に取り扱うことを可能にした一契機であったと言える。

(3) 学会等での成果発表については、以下の「5.」に研究発表の題目を記しておいたが、主に、キリスト教と民族主義宗教との連関（従来は、キリスト教会内部の「異端的」潮流の問題として論じられていたが、その解釈枠組みを超えて、文化的・政治的文脈の中で可能となった文化的・宗教的想像力の表現として捉えられる可能性を指摘した）、民族主義宗教運動における視覚的・詩的表現の特徴（思想の視覚的・詩的表現形態は、思想の普及と不可分の関係にあるのみならず、その美術史的・文学史的位置づけが必要であると同時に、それ以上に美的表象そのものを思想と捉える分析視角が要請されることが明らかにされた）について、従来の解釈枠組みを超えた新たな視点を提示した。

(4) 研究代表者・分担者別に、研究成果の内容を略述しておく。①研究代表者久保田は、従来対象としてきた体制化されたキリスト教と民族主義宗教運動との連関を更に、未刊行資料（テュービンゲン、フライブルク、コブレンツの文書館等）の分析に基づき、これまでの歴史解釈の枠組みを再検討した。その際、反ユダヤ主義的民族主義運動として主に政治的文脈において主題化されてきた、マティルデ・ルーデンドルフ並びにアルトゥーア・ディンターの反キリスト教的・親キリスト教的宗教運動を例として、影響力は減退しつつもいまだ「キリスト教」を軸として構成されている社会の宗教システムにおける、民族主義宗教運動の位置づけを明らかにした。また、ディンターのキリスト教的民族主義運動の重要な構成要件をなすスピリチュアリズムが、民族主義宗教運動と織りなす具体相を解明し、これまで別種の併行現象と捉えられてきたこの二つの宗教思想運動の密接な連関を指摘した。②研究分担者深澤は、まずベルリン・ギャラリー文書部およびベルリン国立図書館において、ドイツ民族主義宗教運動関連の基礎資料及び、民族主義宗教運動家で画家でもあるフィドゥスの遺稿資料の組織的蒐集に努めた。こうした資料に基づき、ドイツ民族主義宗教運動の基本的性格と類型を考察した他、特にフィドゥスおよび同じく画家ルートヴィヒ・ファーレンクロークの

民族主義的宗教理念とそれぞれの芸術活動との関連を解明した。そうした作業を通じて、とりわけ、ドイツ民族主義宗教運動において、こうした美的な潮流は決して単なる傍流にとどまるものではなく、視覚文化が民族主義宗教運動の重要な伝達媒体であったことを明らかにした。③研究分担者前田は、ドイツ（ボン、ケルン、マンハイム、テュービンゲン）、オーストリア（グラーツ）の大学図書館を中心に、ドイツ民族主義宗教運動と「芸術宗教」、「美的保守主義」の関連に関わる研究資料の調査と蒐集を実施した。特に20世紀初頭の芸術・文学運動における典礼的要素の機能に関する資料の集中的分析に従事した。資料の分析を通じて、美的宗教の運動における身体文化、メディア文化の果たした機能をより明確にすることができた。それと併行して、「美的保守主義」の代表的な担い手であったシュテファン・ゲオルグとそのサークルに関する基礎文献であるテオドル・アドルノの『文学ノート』の翻訳を完成し、出版、同じく「美的保守主義」運動の基礎資料である『トーマス・マン日記1918-1921』の翻訳を進め、完成稿を得た。更に、文化保守主義と日独学問文化の形成に関しても考察を進め、成果の一部を公刊した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 久保田浩 「ユダヤ人イエス」の実践性—シオニズムとドイツ民族主義宗教における」、『キリスト教学』、第53号、2011年、1-25頁、査読有。
- ② 久保田浩 「近代ドイツにおける「ナザレのイエス」—「アリア人イエス」を巡って」、『キリスト教学』、第51号、2009年、149-169頁、査読有。

〔学会発表〕（計21件）

- ① Ryozo Maeda, „Aneignung durch Enteignung? Nicht-deutschsprachige Germanistik und transkulturelle Kulturübersetzung: Beispiele die japanische Germanistik“（第4回オーストラリア・ドイツ文学会 The German Studies Association of Australia、クイーンズランド大学、2011年11月30日）
- ② Hiroshi Kubota, „Jesus von Nazareth‘ in der völkisch-religiösen Bewegung“（国際シンポジウム Das Religiöse und der kulturelle

Konservatismus. Zur kulturellen Funktion der Religionen in den sich wandelnden Gesellschaften Deutschlands und Japans (宗教的なるものと文化保守主義—変動する日独社会における宗教の文化的機能)、チュービンゲン大学(ドイツ連邦共和国)、2011年11月4日)

③ Hidetaka Fukasawa, „Visuelle Pietät“ in der völkischen Religiosität: Die Interferenz von Kunst, Politik und Religion im Falle des Malers Fidus.“ (国際シンポジウム Das Religiöse und der kulturelle Konservatismus. Zur kulturellen Funktion der Religionen in den sich wandelnden Gesellschaften Deutschlands und Japans (宗教的なるものと文化保守主義—変動する日独社会における宗教の文化的機能)、チュービンゲン大学(ドイツ連邦共和国)、2011年11月3日)

④ Ryozo Maeda, „Das Religiöse und der Kulturkonservatismus. Einführung zum Rahmenthema des Symposiums“ (国際シンポジウム Das Religiöse und der kulturelle Konservatismus. Zur kulturellen Funktion der Religionen in den sich wandelnden Gesellschaften Deutschlands und Japans (宗教的なるものと文化保守主義—変動する日独社会における宗教の文化的機能)、チュービンゲン大学(ドイツ連邦共和国)、2011年11月3日)

⑤ Hiroshi Kubota, „Die Interkulturalität von ‚Wissenschaft‘? Einige Bemerkungen zur ‚Rezeption‘ von ‚Theologie‘ und ‚Religionswissenschaft‘ in Japan.“ (国際会議 Geschichte und Zukunft der japanisch-deutschen Kulturbeziehungen und interkulturelles Verstehen (日独文化関係の歴史と未来及び異文化間理解)、立教大学、2011年9月18日)

⑥ Ryozo Maeda, „Aneignung durch Enteignung? Zur Japanisierung der Germanistik und der transkulturellen Kulturübersetzung“ (国際会議 Geschichte und Zukunft der japanisch-deutschen Kulturbeziehungen und interkulturelles Verstehen (日独文化関係の歴史と未来及び異文化間理解)、立教大学、2011年9月18日)

⑦ 久保田浩 「「ユダヤ人イエス」と近代ドイツ」(日本宗教学会第70回学術大会、関西学院大学、2011年9月3日)

⑧ 深澤英隆 「「生の宗教」の出現—ジンメル『宗教』の改訂をめぐって」(日本宗教学会第70回学術大会、関西学院大学、2011年9月3

日)

⑨ Ryozo Maeda, „Angstformen in Japan - in einem intellektuellengeschichtlichen Kontext.“ (国際シンポジウム Angst. Lähmender Stillstand und Motor des Fortschritts (不安—麻痺的静止と進歩の動力) グラーツ大学(オーストリア)、2011年6月8日)

⑩ Ryozo Maeda, „Deutsch-Japanische Intellektuelle Geschichte in der ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts: Bildungshumanismus, Marxismus, Neo-Romantik“ (シンシナティ大学大学院人文研究科招待講演、シンシナティ大学、2011年3月3日)

⑪ Ryozo Maeda, „Die Zeitschrift *Die Kastanien* und Exilliteratur“ (国際シンポジウム「東アジアにおける亡命(1933—45)」、学習院大学、2010年9月18日)

⑫ 深澤英隆 「宗教的プレ・ファシズムの位置づけを巡って」(日本宗教学会第69回学術大会、東洋大学、2010年9月14日)

⑬ Hiroshi Kubota, “The Voelkisch Spiritism in the Religio-Political Context”, (XXth World Congress of the International Association for the History of Religions, トロント大学、2010年8月20日)

⑭ Hidetaka Fukasawa, “Creating the Presence of a Religious Past – Ludwig Fahrenkrog on the History of Religion” (XXth World Congress of the International Association for the History of Religions, トロント大学、2010年8月20日)

⑮ Ryozo Maeda, „Humanities“ in der zukünftigen wissenschaftlichen Landschaft“ (ソウル国立大学国際学術シンポジウム „Brain-Cognitive-Mind. Convergence and Ethics of the Future Society“, ソウル国立大学、2009年11月7日)

⑯ Ryozo Maeda, „Gedächtnisse, *reset* und *reloaded*? Berlin und Tokyo in einer transkulturellen Perspektive“ (German Studies Association, ワシントンDC、2009年10月11日)

⑰ 久保田浩 「「アリア人イエス」の宗教史」(日本宗教学会第68回学術大会、京都大学、2009年9月13日)

[図書] (計12件)

① 深澤英隆他編『スピリチュアリティの

宗教史(下)』、総511頁、リトン、2012年。
② Ryozo Maeda, „Angstformen in Japan. Randbemerkungen zu einer modernen Intellektuellengeschichte“, in: Dietmar Goltschnigg (Hg.): *Angst. Lähmender Stillstand und Motor des Fortschritts*, Würzburg: Königshausen & Neumann, 2012, S. 114-122.

③ Ryozo Maeda, „Die Zeitschrift „Die Kastanien“ und die deutsche Exilliteratur“, in: Thomas Pekar (Hg.): *Flucht und Rettung. Exil im japanischen Herrschaftsberereich (1933-1945)*, Berlin: Metropol, 2011, S. 146-156.

④ 久保田浩「ヴァイマル共和国初期における「霊」「キリスト教」「ユダヤ人」—A・ディンター『霊に対する罪』に見られるスピリチュアリズムの諸相—」、深澤英隆他編『スピリチュアリティの宗教史(上)』、リトン、2010年、85-118頁。

⑤ 久保田浩「宗教学からネオナチ出版界へ—「ヨーロッパ宗教史」を語る「宗教学」と「極右」」、竹沢尚一郎編『宗教とファシズム』、水声社、2010年、253-282頁。

⑥ 深澤英隆「生の形成者としての死—ジメルの生 / 不死性論」、深澤英隆他編『スピリチュアリティの宗教史(上)』、リトン、2010年、287-312頁(総426頁)。

⑦ 深澤英隆「宗教的プレ・ファシズムとファシズムの「拒絶」—フィドゥスの場合」、竹沢尚一郎編『宗教とファシズム』、水声社、2010年、125-159頁。

⑧ 深澤英隆「争闘と平和のヴィジョン—フェルキッシュ宗教運動における「非平和」の思想」、足羽興志子編『平和と和解の思想をたずねて』、2010年、219-245頁。

⑨ 前田良三他『アドルノ 文学ノート1』、みすず書房、2010年、総424頁。

⑩ 前田良三他『アドルノ 文学ノート2』、みすず書房、2010年、総395頁。

⑪ 深澤英隆「ドイツ・フェルキッシュ宗教運動における宗教史理解」、市川裕他編『宗教史とは何か(下)』、リトン、2009年、241-276頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久保田 浩 (KUBOTA HIROSHI)

立教大学・文学部・准教授

研究者番号：60434205

(2) 研究分担者

深澤 英隆 (FUKASAWA HIDETAKA)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：30208912

前田 良三 (MAEDA RYOUZOU)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：90157149